

[研究ノート]

幼児の造形表現行為の変容過程に関する実践的研究  
—3歳児の「貼る」「切る」に着目して—

A practical investigation into the learning developmental process of Preschoolers'  
Artistic Expressions by focusing on “cut and paste” of 3 years old child

上田 敏丈・川喜田 奈保

Harutomo UEDA, Naho KAWAKITA

---

*Studies in Humanities and Cultures*

---

No. 28

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 28号

2017年7月

**GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES**

NAGOYA CITY UNIVERSITY  
NAGOYA JAPAN

JULY 2017

[研究ノート]

## 幼児の造形表現行為の変容過程に関する実践的研究

### —3歳児の「貼る」「切る」に着目して—

#### A practical investigation into the learning developmental process of Preschoolers' Artistic Expressions by focusing on "cut and paste" of 3 years old child

上田 敏丈・川喜田 奈保  
Harutomo Ueda, Naho Kawakita

1. はじめに
2. 研究の方法
  - 2.1 調査期間と対象
  - 2.2 記録方法
  - 2.3 分析方法
3. 結果と考察
  - 3.1 造形表現の出発点としての出席カード活動
  - 3.2 3歳児の「貼る」造形表現プロセス
    - 3.2.1 それ自体が楽しい「貼る」経験としてのシール
    - 3.2.2 より広い面にくっつけたい思いに応える接着材料として「貼る」経験となるのり
    - 3.2.3 複合材料をつなげたい思いに応える接着材料として「貼る」経験となるセロハンテープ
    - 3.2.4 T園の幼児にとって「貼る」造形表現行為の変容
  - 3.3 3歳児の「切る」造形表現プロセス
    - 3.3.1 手で「やぶる・ちぎる」
    - 3.3.2 それ自体が目的としてのはさみで「切る」から目的を持って「切る」へ
    - 3.3.3 T園の幼児にとって「切る」造形表現行為の変容
  - 3.4 3歳児の「貼る」「切る」造形表現プロセス
    - 3.4.1 「貼る」と「切る」の往還的關係へ

#### 4. 総合考察

#### 引用文献

**要旨** 本研究は、幼児の造形表現活動を支える力としての「貼る」「切る」という2つに着目をし、どのような活動で、この造形表現行為を行い、そこにどのような意味があるのかを捉えつつ、その変容プロセスを明らかにしていくことが目的である。A県T市のT園の3歳児の1年間の活動を記録した。その結果、造形表現としての出席カード作りの活動をきっかけに、主体的な活動の中で「切る」「貼る」の造形表現行為が展開し、変容するプロセスが明らかになった。

**キーワード**：造形表現行為、領域「表現」、3歳児

## 1. はじめに

幼稚園に入園した3歳児は、身の回りの様々な環境を探索し、保育者や他の園児とのかかわりを通して、様々なものごとを経験していく。もちろん、それは幼稚園教育要領に基づき、保育者の意図的な環境構成や活動の展開を土台としたものである。どのような環境構成を行い、どのような経験を幼児に望むのかは、保育者が日々の保育の中でもっとも腐心するところである。中でも、表現の領域については、音楽的表現や身体的表現、造形的表現（以下「造形表現」と記す）と多様な表現形式を含んでいる。造形表現については、幼児が関心を持つ教材的な研究（例えば、石井、2014など）や造形活動に関する実践事例の紹介（村田、2012・平田、2015・小笠原、2014）などがあげられよう。しかし、レジジョ・エミリアの事例をあげるまでもなく、表現領域において一つの課題となるのが、幼児が好きに描くだけではなく、また技術として習得することだけでもなく、いかに幼児の自発的な思いに根ざしながら、伝えたい思いを表現するかということとは表現領域における一つの課題であり、それを支えるための表現行為に着目することは重要である。

幼稚園教育要領（文部科学省、2008）には領域「表現」として、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」とある。幼稚園の教育は、何かができるようになることを目的とするわけではないが、創造力を豊かにしていくためには、自分なりに考えたことや感じたことを「表現する」ことが必要であり、そのためには様々な表現するための力が必要となる。

本論では、このような力を幼児の造形表現活動を支える力として、特にのりやテープで「貼る」こと、はさみで「切る」ことという2つに着目した。これらは保育者が日々の保育を通して綴る記録をもとに、独自に分析した造形表現における造形表現行為（貼る、切る、折る、かく（書く、描く））としてまとめたものから、抜粋したものである。「貼る」と「切る」に着目した理由は、「貼る」ために使用するのりやセロハンテープ、「切る」ために使用するはさみは、幼稚園に入園後、初めて経験する幼児が多いことからである。園生活を始めた3歳児が、これらの新しい道具をどのように使用し、自らの造形表現活動を展開していくのだろうか。このプロセスを明らかにすることは、単にできるようになるための技術としての習得ではなく、適切な時期を保育者が判断しながら、幼児の「したい」という思いを捉えながら、道具を保育に持ち込む一つの契機となる。

保育における「貼る」「切る」という造形表現に関する先行研究として、例えば、遠城寺(2012)によると「はさみを使って紙を切る」は2歳11ヵ月には69.2%が適切に切るようになる。だが、森下ら(1999)によると、はさみで線をまっすぐに切れるようになるのは6歳6ヶ月であるという。これはそれぞれ論者が定める「切る」のレベルが異なっているため、「切る」ことができる年齢が大きく異なっていると推測される。一方、「貼る」については、ほとんど先行研究が存在せず、60年代に幼児が使用するのりの量について着目し、環境構成の方法について論じたものがあるばかりである（綾部、1969）。鮫島・馬場（2014）においては、独自の3-5歳児の造形カリキュラムにおける、はさみで「切る」、のりで「貼る」活動についての時期と具体的な実践事例を紹介している。

このように、個別の造形表現についての発達の調査は、数が少ないながらも、わずかに検証されているのだが、いずれも、技術としての適齢年齢に関する研究、実技指導のあり方に関する研究が多い。またそれぞれの技術が「できるようになるか」という技術習得の視点でしか捉えられていなかったり、幼児の主体的な活動の過程において発生する、思いや意味をもとに「切る」「貼る」行為については述べられていない。保育においては、単にはさみを使って「切る」ことが重要ではなく、「切る」ことを通して幼児が経験することや幼児の「切る」に対する思いを保育者は捉えなければならぬ。そのためには、幼児が実際の保育の中で、どのように貼り、切るという造形表現行為を行っているのか、そのプロセスを明らかにする必要があるだろう。

よって、本研究では、独自に分析した3歳児の造形表現行為から、「貼る」「切る」に着目し、日々の保育を通して、幼児が自ら育つ力を大切にしながら、どのような活動で、この造形表現行為を行い、そこにどのような意味があるのかを捉えつつ、その変容プロセスを明らかにしていくことが目的である。

## 2. 研究の方法

本研究の対象であるT園の実践概要を記す。

実践園について対象となったT園は、A県T市にある私立幼稚園で全園児数198人、計7クラスで構成されている(本研究で報告する実践を行った2011年4月現在)。平成20年度(2008)にT市公立園の民間移管により新たに出発したことを機に、幼児の主体的な活動を促し、より充実させるための園内外の環境構成としてコーナーを設置した保育形態を取り入れ、日々の保育実践で試行錯誤しながら保育効果を高める努力をしつつ研究を進めている。造形コーナーは、園内環境を構成するいくつかのコーナーの中のひとつである。T幼稚園では、造形表現にも力を入れており、特に3歳児では1年間を通して、出席カードを起点とした造形表現活動の導入等を工夫し、計画している(詳細は後述)。

第2著者は、平成21年度(2009)より造形講師として月に数回、T園の造形表現活動に関する助言や幼児との実践活動に携わっている。そこでは担任教諭とともに、幼児の集団活動場面を担っている。

### 2.1 調査期間と対象

期間は、2011年4月から2013年3月の2年間である。対象は、年少(3歳児)3クラス、園児数66人(クラス平均約22名)、担任教諭は3名(1年目は、女性で1年目、3年目、8年目、2年目は、女性で1年目、3年目、4年目)である。

### 2.2 記録方法

本研究では、造形表現に特化した任意の記録様式に従って、3人の担任教諭が日々の保育を通して記した記録を土台としている。任意の記録様式では、幼児の造形表現活動の場面として、

「かく」「つくる」「あそぶ」「コーナー」「行事制作」「折り紙」などに分類し、そのつながりや状況については「気づき」として項目を加えた。この任意の記録様式に従って、毎月の幼児の様子を担当教諭が記録、第2著者が講師として参加した。記録は、それぞれ3歳児クラス担任1名が毎月1枚以上、記入していた。

### 2.3 分析方法

①第2著者と3歳児クラスの担任教諭が関わった造形表現活動の任意の記録様式(図1)の分析から、造形表現行為として「貼る」「切る」「折る」「かく(書く、描く)」に分類し、対応するコメントを抜き出していった。②それらの造形表現行為に関する項目について、内容を端的に表す小見出しをつけ、時系列に配置した。③幼児の「貼る」「切る」「折る」「かく(書く、描く)」という造形表現行為が1年間を通してどのようなプロセスをたどり展開し、また往還関係が生まれているのかを時系列にして表にまとめた。④造形表現行為の「貼る」「切る」に着目し、改めて第2著者がフィードバックし、プロセスの配置及び解釈が適切であるかを検討し修正した。

尚、本論で用いている名前については仮名であり、写真については園の許諾を得ている。

造形 *記録*		クラス:
11月		
か く	注:「かく」活動について、全体活動、個人での活動などを含みます。撮影や気づき、変化などもあれば。	
つ く る	注:「つくる」活動について、全体活動、個人での活動などを含みます。撮影や気づき、変化などもあれば。	
あ そ ぶ	注:「遊樂あそび(真鍮やスティム、色紙)」などの活動について、シャボン玉や吹雪など、遊樂あそびのいろいろなものを含みます。コーナーの内容も一緒に書いても構いません。撮影や気づき、変化などもあれば。	
コ ー ナ ー	製作・お遊みコーナーに置いてあるものを書いてください。	
行 事 制 作	注:「行事の製作」について、全体活動、個人での活動などを含みます。材料の発見や撮影、気づきなどもあれば。	
折 紙	全体活動、個人での活動なども記載してください。画しのかっこや気づきなどもあれば。	
気 づ き	今更を通して感じたこと、気づいたことや、課題、発見、感想など、子ども達の変化や面白かったことなど。	

図1: 任意の記録用紙

## 3. 結果と考察

### 3.1 造形表現の出発点としての出席カード活動

T園では、遊びを中心とした保育を行っている。その中で、3歳児における造形表現活動の導入等の起点として取り入れているのが、毎朝使用する出席カードである。本園では、毎月使用する出

席カードを担当教諭が手作りで作成し、幼児が楽しみを持って、朝、園に来ることができるように配慮している。サイズは、A4 半分のサイズであり、表紙は保護者の手作りのものを使用している。ひと月ごとにテーマ・素材・ねらいが担任教諭によって話合われ、出席日の積み重ねで完成できるよう素材や内容が工夫されている。保育者との信頼関係を築き、安心して園生活に慣れていくことができるように、出席カードのねらいに基づく活動内容を1日1回、保育者が一対一で幼児とかわかることで、既成の出席カードとは異なる会話やコミュニケーションが生まれ、過程を大切にしながら行うことを目的としている。

例えば、図2は、5月の「お家と木と池」の出席カードの保護者向け案内である。この月では、登園してきた幼児がシールをもらい、保護者と一緒にシールを貼ることを楽しみながら絵を完成していくことができる。同時にこのシールを貼るという行為は、幼児の主體的な遊びの中でも見られるようになる。このようにして出席カードを起点として「貼る」ことが導入される。また、6月では“野菜スタンプを経験する”ことをねらいとした出席カードへと変化しており、7月は“のりの使い方を知る”ことをねらいとして、「あさがお」になるパーツの折り紙を毎朝、のりづけして出席カードを完成していくようになっている。同様に図3は、11月の出席カードであり、T園ではじめてはさみで「切る」ことを導入したものである。



図2：5月の出席カードのねらい（T園保護者向け掲示物より）

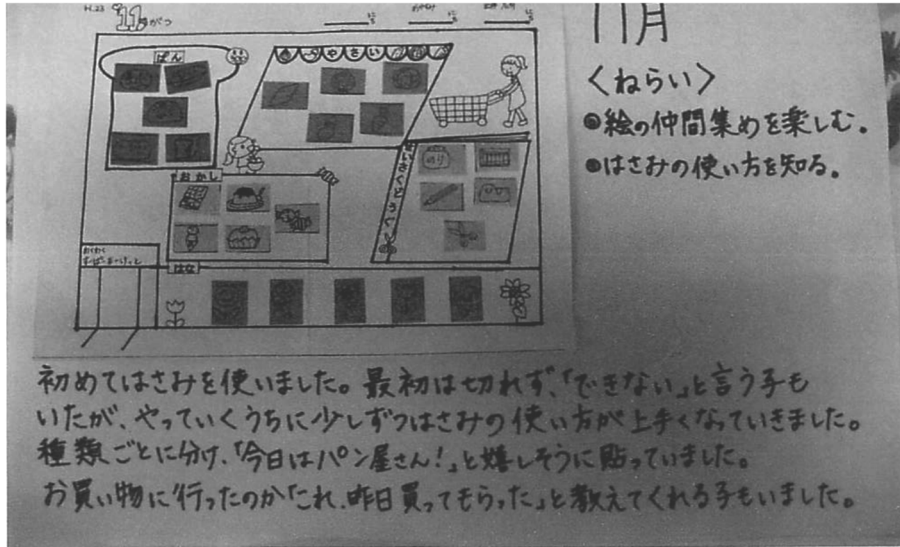


図3：11月の出席カードのねらい（T園保護者向け掲示物より）

このように、T幼稚園では、幼児の造形表現技術を一斉活動の中で教えるのではなく、毎月の出席カードのねらいの中で、毎朝、担任教諭と共に少しずつ経験を積み重ね、全員の幼児が取り組めるように配慮している。3歳児の1年間の出席カードを通して、「シールを貼る」「のりで貼る」「セロハンテープで貼る」「様々なものを貼る」「はさみを一回切りする」「はさみで角をおとして丸を切る」「折り紙を折る」「水性ペンで描く」「スタンプを経験する」という造形表現を経験するようになっている。

このような出席カードによる材料用具の導入のきっかけが、幼児の造形表現行為の変容に様々な影響を与えていくのである。

保育室の造形コーナーには、出席カードで経験した後に、のりやセロハンテープ、はさみなどが環境構成として配置される。材料用具を出す時期を出席カードの経験と合わせているのは、それまで「のり」や「セロハンテープ」を最初から保育室に置いておいた場合、利便性からセロハンテープばかりを使う姿が見られたためである。しかし、保育者としては、ものを貼りたいと考えたときに、何にでもセロハンテープを使うのではなく、貼るものに合わせて、接着材料を考えて欲しいという思いがあった。そこで、セロハンテープを使う前に、シールやのりといった異なる接着材料を使用する経験を十分に行うことで、のりの感触を楽しんだり、遊びとしてのシール貼りを体験することができる。結果として、その後の幼児の活動においても必要な接着材料を選択して使おうとする姿がみられた。また、主体的な遊びの場となる造形コーナーに立ち寄る機会が少ない幼児にも、出席カードで使用した同じ材料用具や素材が設置されることで、手に取って遊びを始めるきっかけとなった姿がみられた。

このように、T 幼稚園では、毎朝、必ず行う出席カードを工夫することで、3 歳児が 1 年をかけてゆっくと造形表現の技術や材料素材を経験し、また、それに合わせた環境構成を行うことで、幼児の造形活動が活発になり、展開できるようにしているのである。

それでは、次にこのような出席カードを起点として幼児が経験した「貼る」「切る」が、遊びの中でどのように発揮されているのか、それぞれについて段階的に見ていきたい。

### 3.2 3 歳児の「貼る」造形表現プロセス

T 幼稚園では、3 歳児の前半に、貼ることを経験するように教育課程を作成しているが、そこには、「シール」「のり」「セロハンテープ」と 3 つの材料用具を順番に導入している。まずはそれぞれの材料用具をどのように経験しているのかを見ていく。

#### 3.2.1 それ自体が楽しい「貼る」経験としてのシール

5 月の出席カードで、シール貼りを経験した幼児に対して、環境構成として造形コーナーにシールを配置しておくことで、興味を持って遊び始める。

このとき、最初は「貼る」行為それ自体を楽しむ姿が見られた。特にそれで何かを目指した制作を行うわけではない（図 4）。その後、学年全体の活動としてのこいのぼり作りを行ったのをきっかけに、好きな遊びの中で、こいのぼりに見立てた広告をシールで貼るなど、接着剤料として使用するようになった（図 5）。このような活動に加えて、幼児は次に、装飾としてシールを活用したり、シールで形を作るようになった（図 6）。



図 4：貼ることを目的とし  
てシールで「貼る」

図 5：見立てたり、接着材  
料としてシールで「貼る」

図 6：製作した双眼鏡に装  
飾としてシールを「貼る」



### 3.2.2 より広い面にくっつけたい思いに応える接着材料として「貼る」経験となるのり

7月の出席カードで、のりで貼る経験をする。「あさがお」をテーマに、朝顔のパーツの折り紙を貼る内容でのりを導入した。造形コーナーにのりを配置すると、幼児は好きな遊びの中で、最初は広告の裏に型紙を沢山のりで貼ったり、大きな紙にお花紙を沢山貼るなど、貼ることを目的としてのりで貼る行為がみられたが(図7)、やがて七夕かざりの経験をきっかけに、広告を折り固定するために貼るなど、接着材料としてのりで貼るようになった(図8)。シールを接着材料として使用するには強度が弱く、また広い面の接着には適していなかった為、のりは幼児の「貼る」欲求を満たす材料となった。特にここでは、自分の指ですくって紙に貼る「でんぷんのり」を環境構成として出している。近年、接着材料としては、水のりやペンタイプのものなどもあり、手が汚れることから、でんぷんのりは日常生活で使用されなくなる傾向にある。だが、でんぷんのりは、自身の指ですくい、接着したい部分や広い面に直に触れて、紙と紙とを接着するという経験ができる。このでんぷんのりをあえて出しておくことに意味があるといえよう。当初は、のりの使用時に、のりを沢山すくって多すぎた幼児も、でんぷんのりの経験を、繰り返し遊びの中で積み重ねていくことによって、徐々に適切な分量の調節ができるようになった。

また、7月には、何となくのりで貼り、できあがったものを見立てていく姿が多く見られたが(図9)、9月になると、自分のイメージに合わせて、目的をもつてのりで貼る姿がみられるようになった(図10)。

### 3.2.3 複合材料をつなげたい思いに応える接着材料として「貼る」経験となるセロハンテープ

9月の出席カードで、セロハンテープで貼る経験をする。「せんたくもの」をテーマに、洋服のパーツを貼るという内容で、セロハンテープを導入した。セロハンテープの導入により、のりでは接着できなかった廃材など紙以外の素材の接着や固定部・稼働部両方の接着が可能となり、造形コーナーでは立体作品が多くなり、遊びの幅がより広がっていった。最初は新しい接着材料として「貼る」行為それ自体を楽しみ(図11)、無駄に貼る姿もみられた。やがて貼ったものに意味付けしたり、見立てるなど(図12)、シールやのりの際と同じような過程がみられた。

だが、11月になると、目的をもって作るためにセロハンテープを使う姿(図13)や、ティッシュ箱同士はセロハンテープで貼り、そこに折り紙で装飾をする場合はのりを使うなど、貼る媒体に合わせて接着材料を変えていく姿がみられた(図14)。最初はセロハンテープを長く切り、接着面がよれてうまく貼ることができなかつたり、無駄貼りも多くみられたが、3月になると、必要な長さや必要な場所に貼る子どもの姿もみられた。



図7: 「貼る」ことを目的とした貼る (のり)  
\*大きな紙にお花がみを沢山のりで貼っている



図8: 接着材料としてののり  
\*三角に折ってのりで貼り、好きな具を描いておにぎりに見立てている



図9: 貼り付けたものを見立てる



図10: 目的を持って「貼る」  
\*人をつくるために型紙や広告を用いて、のりで貼って

### 3.2.4 T園の幼児にとって「貼る」造形表現行為の変容

幼児の造形表現行為を促すために、保育者は様々な教具を環境構成の中に取り入れ、遊びや全体活動を構成していく。T園では、そのために3歳児の最初には「貼る」ということを経験する。しかし、これは単に技術として「貼る」ことができるようになる、知識として「貼る」ための媒体であるのりやセロハンテープを知っている、ということではない。主体的な遊びを通して経験し、課題が生まれ、新たな知識や技術を身につけていく幼児の姿がみられた。T園の幼児にとって、1) 「貼る」行為としてのおもしろさ、2) 「貼る」行為が先に生じ、できあがったものに意味づけをしていくこと、3) 自分の遊びのイメージに合わせて目的をもって「貼る」こと、4) 貼り合わせたい材料にあわせて接着材料を選択し適切に目的を持って「貼る」ことができるようになる、というように、造形表現行為の意味が変容していることが明らかになった。



図11：新聞紙をたくさんセロハンテープで「貼る」



図12：セロハンテープで「貼った」ものに意味づけをする



図13：目的をもって「貼る」  
\* 広告で剣を作り最後をテープで貼る。



図14：複合材料を媒体に合わせて「貼る」

\* 腕と顔はテープ、装飾はのりで貼っている

### 3.3 3歳児の「切る」造形表現プロセス

次にT園の幼児にとって、「切る」造形表現行為はどのような経験であり、意味があるのだろうか。はさみは、どの幼稚園・保育所にも存在するものであるが、それをどのように幼児が使うことができるのかには、その園独自の工夫があるだろう。例えば、何歳児からはさみを使用するのか、また、保育者がいるところでしか使えないのか、自分だけでも使って良いのかなど、刃物の一種であるがゆえに、その取扱については、園ごとによって工夫されている。

T園においては、好きな遊びの中で、幼児がはさみを自由に使えるように、「はさみ」の導入は3歳児の11月まで行っていない。それは、T園が3歳児の造形表現活動の流れをまず「貼る」の経験を土台として考えているからであるが、そのためにはさみが導入されるまでは、制作を行う際には、基本的に「(はさみで)切る」活動がないものを選択しており、必要な際には「やぶる、ち

ぎる」ことを行っている。T 園では2 学期に入ってから、はさみが造形コーナーに設置され、「切る」活動が行われるようになる。

### 3.3.1 手で「やぶる・ちぎる」

主体的な遊びの場では、幼児の「やぶる・ちぎる」行為がみられた。そのため造形コーナーでは、幼児が十分に遊びこめるような環境構成が、保育者によって工夫される。最初は広告や新聞紙などを使って、「やぶる・ちぎる」行為それ自体を楽しむ姿がみられたが(図 15)、ちぎった広告をこいのぼりに見立てるなど、見立てや意味づけが始まり、やがて遊びの目的のためにやぶる姿がみられた。

### 3.3.2 それ自体が目的としてのはさみで「切る」から目的を持って「切る」へ

11 月の出席カードで、はさみで切る経験をする。「お店屋さん」をテーマに、画用紙に印刷されたアイテムから好きなものを選び、一回切りで切ってお店に貼りつけていくという内容ではさみを導入した。はさみは危険も伴うことから、はさみを1本ずつ置くケースをつくり、簡易ゴミ箱を設置するなど環境を整える工夫をしたり、扱い方やルールなど保育者が丁寧に指導している。造形コーナーにはさみを配置すると、「貼る」と同じく最初は「切る」こと自体が目的となり、広告をひたすら細かく切る姿が見られた(図 16)。その後、切ったものをカバンに見立てたり、切って大きさを変えたり、箱の一部を切り取るなどの姿がみられた。「やぶる・ちぎる」では不可能だった切り方ははさみの導入によって可能となり、また、紙や布など様々なものを切る挑戦をするようにもなった。それはやがて、切りやすい素材を選び目的の形を切る行為へと変容していく。

引き続き12月の出席カードでは、「ゆきだるま」をテーマに、正方形の画用紙の角をはさみで1回切りで切り落とし、丸の形をつくる経験をした。はさみを使った出席カードの11月、12月の経験を通して、はさみの扱い方やルールなどが幼児に伝わり、造形コーナーでもはさみを使った活動が活発に行われるようになった。やがて遊びに必要なものをつくるために、目的を持ってはさみで切るようになる。3月になると、生活発表会の経験も影響して、自分で絵を描いて切り、それをお面や身につけるアイテムにして遊びに使うなどの姿もみられるようになった。(図 17)(図 18)。

### 3.3.3 T 園の幼児にとって「切る」造形表現行為の変容

このように、はさみを導入したことによる幼児の造形表現行為も、「貼る」と同じく最初は「切る」こと自体が目的となり、やがて幼児自身の制作目的にそった「切る」へと展開していった。

1) 「切る」行為としてのおもしろさ 2) 「切る」行為が先に生じ、できあがったものを見立て、意味づけをしていく 3) 自分の遊びの制作目的に沿って「切る」 4) 様々なものを切ることを経て、切りやすい素材を選んで「切る」 5) 目的のものを絵に描いて切り、遊びに使う、というように、造形表現行為の意味が変容していることが明らかになった。



図15: 「やぶる・ちぎる」  
\*新聞紙をちぎる行為それ自体を楽しむ



図16: はさみで「切る」  
\*細長い紙をひたすら小さく切っている

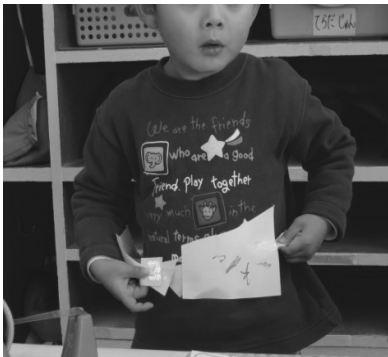


図17: 制作に必要な大きさに「切る」  
\*変身ベルトにする為にコピー用紙を切ってつくる。



図18: 目的をもって「切った」ものを遊びに使う

### 3.4 3 歳児の「貼る」「切る」造形表現プロセス

ここまで見てきたように、「貼る」「切る」の造形表現プロセスでは、もて遊びの中から意味が生まれ、その意味は更なる遊びを生み出し、ものや素材、人や環境を介在させながら、より豊かな遊びへと変化した。また、「貼る」=接着によって起こる形や色、質感の変容や、「切る」によって起こる形の変容や空間の出現は、幼児のイマジネーションをかきたて、幼児の遊びの原動力となっていた。創造の喜びは、幼児の自発性を励ます。これは、花篤・岡田(2004)による「つくる活動の発達段階」に相応する。「幼児のつくる活動をみると、運動的能力・知的能力・イメージする力・感情などの発達と深くかかわり、活動とこれらの能力とは互いに依存関係にあり、発達段階に応じて適切な活動をさせることが教育上大切である」としている。出席カードを起点に導入された造形表現行為が、幼児の日々の生活の中で主体的に繰り返し行われることによって、単にできるようになるというよりは、発達段階に応じて、遊びを生み出しながら技術や知識を獲得していく過程がみられた。

これらのことを含みながら、「貼る」「切る」造形表現行為は共に、最初はその行為自体を楽しむことから、見立て・意味付けが始まり、やがて目的を持って自身の制作イメージにあわせた技術として活用できるようになるプロセスをたどることが明らかになった。つぎに、これらの2つの力がどのように複合的に行われているのかを見ていく。

### 3.4.1 「貼る」と「切る」の往還的關係へ

1～2月になると保育室の造形コーナーには、ティッシュ箱や牛乳パック、トイレットペーパーの芯など、様々な素材が配置され、幼児の思いに応じて制作活動を行う姿がみられるようになった。例えば、2月には発表会の経験も踏まえてごっこ遊びも盛んになり、役になりきって、牛乳パックのカップに「ぶたのごはん」をハサミで切って作り、持ち運びもできるようにカップに紐をくっつけるなど、「切る」と「貼る」の往還的關係が様々な場面でみられるようになった(図19)。また、3月には、あらかじめ服につけるという目的をもって、自分で描いた絵をはさみで切り抜き、服に貼ってごっこ遊びに活用するなど、技術面でははさみを細かくコントロールする姿が見られた。

このように、ピアジェの認知発達論における「前操作期(前概念的思考の段階(2-4歳))」を背景に、主体的な遊びの中でイメージする力はより豊かになり、それぞれの子どもの中で獲得された造形表現行為を、複合的に生かしながら制作が展開される姿がみられた。また、つくることで満足するだけでなくつくったもので遊ぶ幼児も増え、遊びの広がりに伴い、幼児の活動の場が造形コーナーと異なるコーナーを行き来するなど、遊びの場の往還的關係もみられるようになった(図20)。



図19: 「貼る」と「切る」①

\*紙(ごはん)をはさみで切り、ひもを貼って持ち運べるようにする。



図20: 「貼る」と「切る」②

\*紙管をつないで鉄砲をつくり、箱の一部を切って引き金に弾が入るよう工夫している。

#### 4. 総合考察

ここまで、T園における3歳児の「貼る」と「切る」という造形表現行為に着目して、園でどのような形でそれらが経験され、そこにどのような意味があるのかという変容過程を明らかにした。本研究からは、次のことが言える。

##### ① 技術ではなく、行為の意味として造形表現行為を捉える必要性

一部ではあるが、3歳児の造形表現行為「貼る」や「切る」を経験して欲しいと考えたとき、時にはワークドリルを使用し、ただラインにあわせて「切る」ことやシールを「貼る」ことが行われている場合がある。しかし、本研究でみてきたように、幼児の造形表現行為は、それ自体が楽しいという時期から、できあがったものに意味をつける、自分が作りたいものにあわせて行う、という意味内容の変容過程がある。従って、改めて幼児の自発性が発揮するような環境構成の工夫や活動の導入が必要であること、また、幼児が創りだす遊びのムーブメントの行方やその過程で現れる幼児の成長の姿を見通しながら、その時期に応じて適切な活動を選択する必要があるといえよう。

##### ② 多様な材料を使用することの必要性

近年では、接着材料としての利便性からセロハンテープを多くの園が使用している。しかし、同じ「貼る」でも、材料が異なれば、その材料の特性に応じて幼児の「貼る」経験が異なっていることが明らかになった。

つまり、同じ「貼る」造形表現行為でも、どのような「貼る」を経験して欲しいのかで、必要な材料は異なる。また、これは単に様々なものがあればよいということではなく、適切な時期に適切な材料を用意し、その後、多様な材料を選択できるような環境構成が望ましいといえる。

##### ③ 多様な造形表現行為の連携への配慮

3歳児の3学期では、幼児の「貼る」と「切る」とが往還的に発揮されている姿がみられた。本研究では、この2つに着目したため、その他の造形表現行為は取り上げていないが、「折る」や「書く・描く」といった行為も含めた多様な造形表現行為が連携し、往還的に発揮されるように配慮する必要がある。そのために、保育者は、3歳児の発達の道筋をイメージしながら、幼児が創りだす主体的な遊びの姿に寄り添った、教育課程を構成する必要があるだろう。

最後に、本研究の限界と課題を述べておく。

本研究は、T園で実践されている造形表現に着目して、その3歳児なりの意味を捉えたものである。この点において、この実践で述べていることはT園の保育から現れてきたものであり、それが必ずしも他園の実践に直接有益となるものではない。また、「貼る」「切る」行為の導入やその後の展開も、T園で行われてきた保育の蓄積によって、構築されてきたものであるため、他園への汎用可能性は低いといえよう。

T 園の保育実践についても、教材用具の導入の時期の再検討や造形コーナーの環境構成の再考など、実践的課題がまだ数多く考えられる。また調査の方法についても、再検討が必要である。T 園での3 歳児がその後、4 歳、5 歳となるに従ってどのような造形表現を行っていくのかを明らかにしていくことも今後の課題となる。

## 引用文献

- 綾部純子 1969 「絵画製作に関する一考察－特に製作活動に用いる接着材料「のり」について－」  
『幼児の教育 68(10)』 pp. 26-34
- 遠城寺宗徳 2012 『遠城寺式乳幼児分析的発達検査法』 慶応義塾大学出版会
- 石井健 2014 「造形活動における提供素材による幼児の関心の違いについて」『駒沢女子大学研究紀要 47』 pp. 67-74.
- 小笠原文 2014 「触覚から考える造形表現：2つのワークショップ実践からの考察」『広島文化学園大学学芸学部紀要 4』 pp. 19-28.
- 森下孝夫 伊藤信寿 田端幸枝 近藤敏 吉川ひろみ 宮口英樹 1999 「ハサミで線や形を切る発達時期の調査」『広島県立保健福祉短期大学紀要 4(2)』 pp. 37-45
- 文部科学省 2010 『幼稚園教育要領』 文部科学省
- 鮫島良一・馬場千晶 2014 『保育園・幼稚園の造形あそび』 成美堂出版 pp. 24-63
- 花篤實・岡田敬吾 2004(改訂版第 4 刷発行) 『幼児教育法講座 造形表現<理論・実践編>』 三晃書房 pp. 35-36
- \* 「つくる活動の発達段階」：(1) もてあそびをする (3 歳頃まで) (2) つくったものに意味づけをする (3-4 歳) (3) つくったものであそぶ (4-6 歳)
- 平田智久 2015 『実践！造形あそび』 ナツメ社
- 村田夕紀 2012 『0・1・2 歳児の造形あそび 実践ライブ』 ひかりのくに株式会社